



麻布幼稚園だより

令和3年5月号
港区立麻布幼稚園
園長 酒井 正美

園庭には、こいのぼりが気持ちよさそうに泳いでいます。緊急事態宣言が再発令される中、保護者の皆様には、様々な面でご理解・ご協力をいただきありがとうございます。このような状況の中ですが、変わらずに毎朝、元気に登園してくる子どもたち、そして保護者の皆さんと挨拶できることをうれしく思います。



年長・年中組では、立ち止まり、目を見て自分から挨拶をしてくれる子が多く、とても素敵だなと思います。年少組では、ニコニコ笑顔の挨拶をしてくれたり、チラリと顔を見たりと、その子なりの挨拶をしてくれる姿が見られます。「おはようございます。」と、言葉でしっかりと挨拶ができるようになってほしいと思われるかもしれませんが、無理に言わせようと急がなくても大丈夫です。挨拶の仕方を伝えることは大事なことでありますが、大人同士が気持ちよく挨拶を交わす姿に触れることから、徐々に相手に挨拶をしたいという気持ちをもったり、挨拶をする心地よさを味わったりしてほしいと思います。形とともに心が通う素敵な挨拶ができるようになることは、子どもたちの一生の宝物ですね。

入園、進級から1ヶ月が経とうとしています。どの学級の子どもたちも、担任への信頼感を基盤に新しい環境での生活のリズムが感じられるようになってきました。朝、お家の方と離れがたいということがあっても、担任との関わりを通して遊び始める様子が見られます。

4歳児年中組の子は、3歳児年少組の子が泣いているのを見て、「大丈夫だよ。」と声を掛けていました。3歳児年少組の担任に「〇〇ちゃんも、小さいときはたくさん泣いたよね。」と言われると、「うん、そうだね。」と答えていました。4歳児は、時折、3歳児の様子や自分の保育室だった部屋を見にきていました。5歳児年長組は、入園当初からしばらく、年少3歳児の朝の支度を手伝って来ていました。声を掛けてもなかなか動いてくれない相手に、あの手この手で関わり、年少組の担任から「ありがとう。助かったよ。」と、声を掛けられるととてもうれしそうな表情をしていました。新しい環境の中で生活をし、自分より小さい学年の様子を見たり関わったりしながら、一人ひとりが、一つ大きくなったことを、それぞれのペースで実感している様子が見られました。

幼稚園生活が営まれる集団の中では、担任や学級の友達との関わりだけではなく、園内にいるたくさんの教職員や異年齢の子との関わりを通して、幼児は自己の存在感を確認し、自己と他者の違いに気付き、他者への思いやりや信頼感を深めています。様々な「人・物・こと」との出会いから関心を広げ、経験を積み重ねていきます。楽しいこと、うれしいこと、時には挫折感や葛藤も味わいます。そして、これはどれも一人で経験できることではありません。幼稚園というたくさんの出会いが生まれる場で、幼児にとっての学習である「遊びや生活」を通して、子どもたちはゆったりとじっくりと成長をしていきます。

あらゆる物がデジタル化される便利な世の中ですが、子育て、教育はそうはいきません。大人の勝手なペースに巻き込むことなく、一人ひとりが経験していることに向き合い、自ら伸びようとする力、育とうとする力を、園全体で支えていきたいと思っています。アナログな時代を大切に、とことん付き合っていきたいと思っています。子どもたちの姿を共有しながら、貴重な幼児期の成長を、保護者の皆さまと一緒に支えていきたいと思っています。